
国家形成テンプレ/ついでに人間チート

心海2000+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国家形成テンプレノついでに人間チート

【Nコード】

N0111Y

【作者名】

心海2000+

【あらすじ】

大体題名通り。面倒になったら消す予定。何処まで続くか未定。それでも読む稀有な方はそのままクリック。

第一話

どき、と地面に落ちる音がする。ついでに走る衝撃。間違いなく、俺は地面に叩きつけられていた。

あまりの粗雑な扱いに一瞬だけイラツとしたが、そこはもう大人なので一応我慢することにした。

コキコキと肩をまわしてから辺りを見回してみる。そこは一面大森林としかいえないような、森に囲まれた場所だった。

というか森の中だった。瑞々しく、隆々と聳え立つ巨木が、思わぬ珍客である俺に対して「邪魔だ帰れ」と圧迫してくる印象を受けた。完全に被害妄想であるが、これから行っていくことを考えると一概に否定出来ないから困りものである。木を切り倒して文明を切り開くという面倒なことをしなければならぬのだから。

『おい、一通り落ち着いたら反応してくれ』

急に声が聞こえてきた。後ろを振り返ると、珍妙な像がある。どうやら、これと共に俺は長い間過ごさないとイケないらしい。

「……本当にやらなきゃダメか？」

『契約は絶対だぞ。ヤーハウエだつて「わし浮気とか許せない人だから」って言ってただろ？ 私もその類である』

「かー、なんか騙された気分なんだけど。もうさー、なんか騙された気分なんだけど！」

『そついうなよ、君は選ばれた民なんだぞ。これから一緒に凄い存在になるんだから頑張つて！』

「……まあ、頑張っていくからさ、ちょっと威厳出そうぜ」

「な、神様？」

第一話「神様に威厳は求められていない時代」

「……ここ何処だ」

目が覚めたら知らない場所にいた。知らない場所とは知らない場所という意味だ。

しかしながら、今経験をしているのは自分の知っている範囲で知らないという意味ではなく、今まで見たことが無いという意味で知らない場所だった。

辺り一面が延々と真っ白。地平線の先まで真っ白である。こんな風に白に埋め尽くされた世界を、俺は見たことがなかった。

俺が知る限り、初の出来事である。常識的に考えて、こんな風景がどこかにあると想定したことはなかった。

「いや、本当にここは何処なんだ」

立ち上がってより遠くを眺めてみる。しかし、何の意味もなかった。白は白なのだ。特に変化はない。

何処を見てもまったく同じ景色。それが果てしなく続く世界。とりあえず憶測一つ、俺死んだんじゃない？

「俺、死んだ」

口に出していつてみる。存外しっくりと来た。どうやら実感はまだ出来ていないが、死んだという状況を理解してはいるらしい。

死因はまだ思い出せないが、死んだという事実だけは理解している
感じだ。

ちよつとちぐはぐで意味わからない思考だが、それを納得してしま
っている自分もいた。

「んー、俺死んだかー。俺死んじゃった系かー。なるほどなー……」

納得してしまつたが認めたくはなかつた。やはり死んでしまつたと
いう事実は嬉しくないものである。

まあ、ここで「俺死んだぜイヤツフウウウウウウ！」と叫ぶ
奴がいてもおかしいわけなので、俺のこと考えは正常なのだろうが、
ちよつと認めたくはなかつた。

やっぱり死ぬ前はあがく感じが必要なのではないだろうか。あが
いてダメだから諦められるのであつて、なんかスッキリ死んでハイ・
オシマイというのは少し違う気がする。

しかしあがくといつても、対して有効な何かは思い浮かばなかつた。
最終的に俺は白い地面にあぐらをかいて座つて、ポケットとするだけ
しか出来なかつた。

「……死んだかー。死んだねー。つうか死んだのかよー。もうちよ
つとへこむんだけど死んだのー？」

「死にましたよー」

急に声も聞こえてきた。どうやら幻聴ではなさそうだ。

あたりを見渡しても誰もいない。しかし、声はずつと響いている。

「ねーねー、死んじゃつてどんな気持ち？ どんな気持ち？ 今、
きみ人生終わつただけだけど、ねえどんな気持ち？」

「うぜー、何この現象。やばい、ちょっと理解したくない」

『まあ、そういうなよ。死んだって別に良いじゃん。どうせ死ぬように人間と設定されてるんだし。どうせ後10年もしないうちに健康害したり機能が落ちたりしていたんだよ？ そう考えれば一番油乗ってる時期に死ねて良かったね！』

「何も良くねーよ……」

俺は立ち上がって辺りを何度も見渡す。

小さすぎて見えないという可能性とかも考慮したり、遙か上から見ているのかも思い、色々と試したがどうやら効果はなさそうだ。無駄な行為だと思ったので、俺は地面にあぐらをかいて声にだけ耳を傾けることにした。

『まーねー。正直ねー、励ましてるんだよー？』

「嘘つけよ……。もうへこんでるんだから話しかけるなよ。俺今へこんでるの。人間的に死んじゃった事に対する悲しみを背負って生きてるんだからさ」

『現実見てよ、君は死んでるからね。生きてないから。残念だったねー』

「くっそ〜、認めたくねー。俺まだうどん屋で全部ミックス大盛り頼んでねーぞ！」

『小さすぎないかい？』

「小さくて良いんだよ、でかいことなんて金なくて出来ないんだか

ら。それでさつきから話しかけてくるお前は何だよ。いい加減ノリにノってやってるんだから名乗れよ」

『それもそうだね。今姿見せるから』

ポンと軽快な音がすると目の前に謎の青年が現れた。背は高くない、デブでもない。特に顔に特徴もなかった。有体に言えば地味の極みである。

いや、もっと、もっと違う何かのような気もする。強いていえば確定してない固体だろうか。

いやいや、それも少し違うかもしれない。とにかく、目の前にいるのに個体情報というものが把握出来ないのだ。

認識が出来ない。知覚出来ない気にさえさせる、そういう容姿である。映像でも適切な表現は出来そうもない存在がそこにいた。

「……………透明人間か？」

「随分面白い表現だね、ちゃんと受肉してるはずだけど？」

「ん、それは間違いない。ただ、お前何処か人形みたいだ。ああ、そうか。顔の形や位置、うわっ！　そういうえば体型も左右対称じゃない！　そりゃあ違和感覚えるわけだわ、気持ち悪っ！」

「左右対称って変なことかい？」

「ああ、おかしいと思う。人間じゃないのは確かだな。で、結局ここはあの世ってことはそっちは神様のな？　そういうアレですかね？」

「神様ではないかなー、候補ではあるけどね」

「神様候補ねえ……半神半人とかそういうのか？」

「そういう意味でなく、そのまんまの意味で神様候補だよ。神様になれるかもしれない、なれないかもしれない存在。実は体も仮なんだよね。変化しちゃうものだから、こういうのって」

「あ……で？ 神様候補とこんな場所で二人きりなんだけど、俺は今すぐ土下座とかしたり平伏した方が良いの？ 無礼だからって永遠の時を彷徨ったりしちゃう系的なの？ ないよね？」

「ないから安心して良いよ。ここにいるのは君も候補の一人だからってだけだから」

「候補？ え？ もしかして今からバトルロワイヤルするの？ それで最後に残った奴が神になるとか？ 神様候補だけに？」

「ないない。君、神様になるようなことしたの？」

「正直あのまま生きていたら魔法使いにはなれていたような気はする」

「候補っていうのは、今から世界創造するんでソコで僕の神代として活動してもらったための候補だよ」

「……………ほう、随分と突発的だが魅力的なお誘い」

「食いつくねー、良いけど。まあ、神代になって世界作るお仕事一緒にしてもらおうと思ってるね。良い思いも時々出来るかもよ。基本は良い思いしないけど」

「基本しないの？」

「努力次第かな。まあ、詳しい説明は候補決定者にしかしないからなる気がないなら適当に聞き流してよ」

「何でいつてくれないんだよー！ 選びようがないじゃん！ もっと詳しく教えて、そんでもって色々教えてくれよ」

「申し訳ありませんが当社では入社していない方に当社のマニュアルをお渡ししたり、わざわざ業務内容の説明などは行いません。ご了承下さい」

「何これー、やめてくれない。俺まだ高校生だから。入社とかまだ先の話じゃん！ ほら、卒業まで一年あるし大学入れば五年もあるよー！」

「そんなこといつてるうちにー、いつの間にかー、全てが過ぎるー。世の中の就業失敗者の数を数えるおおおお！」

「クソがー！ なんだこれ、入らないと、今入らないとマズい気持ちになつて来る！」

「ほら、口頭で行っても良いかもって口に出しなさいなー、楽になれば良いんじゃないよー？」

「いや、まあ、こんなノリでなくても普通に行くけどね。俺死んでるし」

「行っくつていったよね？ やったー、これで楽が出来るぞー！」

「理由それかよ……」

『はい、私もう受肉しない。絶対しない。ほら、もう言霊に戻ってやっただぜ、ざまーみる!』

「何この神様、ゴミクズすぎるんだけど……」

『まだ候補だからー、残念でしたー。実際に世界に降り立たないと神様でも何でもありません。威厳とかは千年くらい立ってから備えれば良いんじゃない?』

「まあ、良いけどさ……」

『それじゃ、もうさっさと世界行くかねー! オラァ! ワープ!』

「超展開すぎる!?!」

『威厳とかさー、別に良いじゃん。大体神様なんてやること大人気ないもんじゃんか。君さー、ゼウスの所業知ってるでしょー? 完全にただの色狂いだからね、あいつ。マジはないわ。神話化されて力震えなくなってるやんのプーって感じだよ!』

「ゼウスって何やったの?」

『とりあえず美女と美男食いまくったかな。もうそれ以外どうでも良いよ。あいつ美女と美少年いれば何でも良い奴だし。男?女?食えれば何でも良くない? が心情だからね。イーリヤスとか見て

みるよ、トロイもスパルタもゼウスの家系なんだぜー、受けるー』

「いや、受けないけど……面白くねえよ」

『そうか？ まあ、良いや。今からお前に重要な任務とか教えるからそれっぽく聞きなさい』

「……何？」

『神様つて奇跡使えるじゃん？ 奇跡。で、像になった私ですが、けど使えるんだけど残念なことにお前という神代がいるので無制限に使えません。残念だったな、お前が良い思いできるかもといったが、アレは大嘘だ。基本良い思いとকাশないから』

「おおおい！」

『まあ、君なら何とかなるよ。加護そのものは働いてるしね。凄にお得能力満載だよ。もう、何とか今この状況にびったりな能力？』

「どんなどんな？」

『その辺で寝ても体力回復出来る能力』

「ありがたいけど嬉しくない……」

『細かいこたあ気にするな。な、その辺で寝ても体力回復出来るなんて素敵やる？ 状況びったりだろ？ 森の中だからね、その辺で野宿すれば良いじゃない』

「おい、ちょっと待ってくれ。寝て体力回復するのは良いんだけど

第一話（後書き）

始まる。そしていつか終わる。

ゴシゴシと像をさすると、そこからピカピカの状態の像が出てきた。新品さながらの美しさ。

「お、お？ 何で像がこんなに綺麗なんだ？」

『あー、奇跡使ってるからねー』

「え、奇跡って有限なんじゃ……」

『寝てる間に汚れなくなかったので勝手に使った、今は反省もしている。後悔はしていないが』

「てめー！ どういうこつたあ！」

『まあ、待ちたまえ。最初のキャラは何処にいった、口が汚すぎるぞ？ ん？ この威厳溢れる私のように初期キャラは維持したまえ』

「お前の何処が維持出来てるんだ！ どう見ても維持できてないだろう！ それよりも一拳に意味不明なことが起きすぎて脳みそがパク寸前なんだよ！ どうなってんだこれ！」

『君に起きた現象を簡単に説明するとだね、まあ、動物で言う冬眠みたいなものが訪れただけだから、安心したまえ。その間、基本的に神代は動けないという制約があるんだな、これが』

「……そんなシステムがあるのか」

『神が沈黙する時は大抵そういう時だ。いくら凄い神でも、その間を狙われたらどうしようもないわけだ。まあ、今回はまだ信仰者も

いないし文明らしい何かも全然ないし、何気にすることはない』

「……………ん？ ちょっと待て、じゃあ何で俺に眠るように仕向けたんだ？ その間、眠り続けるって知っていたならいろいろ準備してからの方が都合が良くないか？」

『それを説明するには行動をしてもらった方が良い。ちょっともう一度眠ろうとしてみる』

その言葉を受けてしぶしぶ横になる。冷たい雪とやばいくらいの低体温が俺を襲う。それによって俺は眠く　ならない？

「あれ、全然眠くならない」

『神代は休眠期ではない限りは無理に寝なくて良いのさ。だから眠くならないし、24時間働けるし、過労死とかもない。素敵だろう？』

「その代償が四ヶ月の時点で少し割に合わないだろうよ……………」

手で顔を覆って嘆いた。これから食料をどうにかして探さないといけないのに、周りに食料が無さそうです。本当にありがとございしました。

「ん？ ちょっと待ってくれ。それじゃあ、俺がその辺で寝ても体力回復出来る能力ってどれほどの意味があるんだ？」

『さつきいつたる？　無理に寝なくて良いって。言葉通りの意味で無理に寝れば眠れるの、休眠期でなくても。今はその無理をしてないから眠れないんだと思う』

「無理って、どうすれば無理になるんだ？」

『奇跡使えば良いんじゃない？』

「有限なんだから！？ 寝るのに奇跡必要って意味わからないわ！
奇跡って何なんだよ！」

『おお、そういえば奇跡について説明してなかったね。まあ、簡単にいうと奇跡はある特定のポイントを溜めると行使できるようになる能力の総称みたいなもんだよね。法則を無視して行えるし、何よりわかりやすいので奇跡ってなってる。別に魔法でも良いんじゃないよ？』

「ある特定のポイントって何だ？」

『色々種類があるからねー。一気に説明してもわかりにくし、何よりどうせ使えるのが一つなんだからそれだけ教えておくよ。今使っているポイントは「神格ポイント」だね。簡単にいうと、神様っぽいことをしていると勝手にポイントが溜まるよ。人を導いたり、人の前で奇跡を起こしたり、もしくは神話に名前が出てくるようになって存在が知られると勝手に増える』

「……俺、何か神様っぽいことしたかな？」

『神様っぽいかは知らないけど森の中で眠り続ける存在がいて、獣が襲わない上に汚れないとそれっぽいとは思うよ？ 結構曖昧だからね、判定が』

「ああ、そういう……眠ったのも別に無駄ではなかったということ

かな？」

『そうだね。無駄ではなかったかもね。ただ、微々たる量しか増えてないけど』

「良いよ、別に。それで、そのポイントは今、幾つあるんだ？」

『え？ 0 だけど？』

「はい？ 今増えたって言ったじゃないか。その分のポイントは？」

『いや、最初に奇跡使ったって言ったじゃない。ごめんねー、ボクがー、君のポイント勝手に使っちゃってー』

「もうマジやべえ、キレル通りこして泣きそうなんだけど……」

『別に良いじゃない。また、一緒に二人で貯金して行きましょうよ』

「お前が勝手に使ったんじゃないか！ 何が二人で、だ！ 俺しか溜めてねえからな！」

『シャチョウサーン、キュウリヨウ、クレナイトー。ダメダヨー』

「働いてない奴に給料もくそもあるか！ 俺の食料とかどうするんだよ！」

『心配するな。実は君が寝ている間に、君に対しても奇跡を適用しておいた。それを活用するが良い』

「え？ そうなのか？ なんだ、それを早く言えよな。そうだよな、

無理すれば眠り続けられる能力

第三話

「よし、目が覚めたぞ」

一体何度目の起床だろうか。起きてしまったびに何度も何度も気合を入れて睡眠をしてきた。良い加減叫んで寝るぞ！と本気で願った瞬間に眠るのも慣れてしまった。こういうのを大人になったというのかもしれない。

辺りを見渡すと、雪の残りは確かに見えるが、しかし季節は間違はなく春だ。春。芽生えの季節、そして、新たな日々が始まりの時だ。

「そうだ！ 俺は、この春に凄い神代として働いてウハウハしてやるぜー！ いやっふー！」

『まあ、そのために半年眠り続けたんだだけだね。いやー、来年の春から本気出すために半年近く寝ちゃうとか凄いですねー、神代様！』

「そうさせたのは誰かなー？ この野郎！ 本当にさー、俺が出世とかしたらよー、すぐに像を壊して邪教として弾圧してやるから覚悟しろよ、テメー」

『言うておくけど私いないと、君奇跡使えないからね。はは、裏切れなくてざまー！』

「うおー！ こいつ本当にムカツクー！ もういいよっ！ それよ、俺はどんな行動をすればポイントが高まってウハウハれるんですか？ 邪神野郎」

『邪神じゃないよー、とつてもクリーンな神様だよ！ 旧約聖書で

出てきたバル神くらい凄くクリーンだよ！ 信じようよ！」

「バル神ってのが何なのかわからなから放置するけど……んで、本当にどうすれば良いの、これから。何かしたら良いんでしょ？ 何をすれば良いんだよ、マジで！」

『うーん、今のところは特に何も。神様なんて信仰対象がいなきや意味ないからね。さっさと私という崇高で叡智溢れ、超自然的存在を崇拜してくれるようなの探してこいよ、本当に』

「いや、でもこの森の中に人の気配なんてないんだけど……？」

『あー、そうねー。じゃあ神格ポイント溜めるために動物使うつてのも手だよ。動物に奇跡力を与えて、色々活動させると、それを媒介にして奇跡ポイント溜まるからー』

「そうだ、そういえば奇跡ポイント溜まってるんだよな？ どれくらい溜まってるんだ？」

『今？ 神格：12 文明：2 ってところだね』

「ん？ 神格は説明してもらったけど、文明ポイントって何だ？」

『文明は、言葉の通り文明のを起こしたら溜まるポイント。これの良いところは自分でやってもポイントが高まるところ、その代わりに色々割高。君が寝にくいとかいって軽く雪を集めてかまくらみたいの作ったでしょ？ それが原始人の洞窟っぽいとかで加算されてた』

「どついう理由なんだ、それは……。けど、文明が2ポイントか。ふむ、良いね。でも2ポイントじゃ全然使えないし、今は放置で良

いかもな」

『文明はちょっと特殊で、自分でやっても良いっていったけど、実は真価を発揮するのは他人にやらせた時なんだよね。それをさせるだけで文明ポイントは勝手に加算される』

「お？　と言う事は、俺を信仰する人間がいて、さらに文明的なことを教えた際にはそれだけで神格と文明の両方が手に入るってことか？」

『そういうことになるね。まあ、文明は判定が凄い特殊だから、その時になっただらもっと詳しく教えてあげるよ。それより、早く信仰対象を探すために動物探そう。それに、もう眠らないんだっただら君も食べる必要が出てくるんだから色々頑張らないと』

「それもそうだな。それじゃあ、ちよっくら森の中でも散策するか」

第三話「都合よく行かないなら、都合よく行くようにすればいい」

森の中を歩く。森というと、都会人はもしかしたら爽快なイメージを持つかもしれない。しかし自然のままに育った自然というのは力オスそのものである。

育つ、種を落とす、育つ、種を落とす。それを延々と繰り返しているせいで地面などというものがほとんどない。

歩くのは必然的に木の根ということになる。俺の胴体ほどもある木の根を踏みつけにしながら先を進む。

それにしても、木々の間から虫やら何やらが大量に現れるし、訳のわからないツタが通行を邪魔するので思うように進まない。

はつきりいつて、だるいことこの上なかった。

さらに、そんな音を立てながら歩いているせいか、動物が周りに現れてくれない。

いや、この場合はもしかしたら幸運なのかもしれない。動物、と一括りにしているが、大型獣が出てきた場合に俺が出来ることは少ない。

「……なあ、動物出てきてもどうやって奇跡の力を分け与えんの。その前に俺死なないの？」

『いまさらな疑問だなあ、もう少し早く突っ込むものかと思ってたんだけど』

「は？ それじゃあ、もしかして食われること前提で話は進んだの!？」

『いやいや、違うから。神代は能力がそれとなく強化されてるから、動物程度ならどうとでもなるよ。ハンドパワーで』

「ハンドパワーって、どんなパワーだ？」

『その木の幹掴んでみ』

「おう」

『握ってみ』

「ほい」

木の幹がバキバキと小気味良い音を立てて割れていく。そんなこと

をすれば本来は手の平に大量の気の欠片がついてそうだが、そういうこともなかった。

さらにいえば、そもそも木の幹を破壊できている時点で凄いことだ。なるほど、確かに強化されているようだった。

「うん、確かに凄いわ。で、これとハンドパワーとどの様な関係が」

『ハンドパワー（握力）』

「いや、確かに間違いなくハンドパワーだけど、こつこつのは単純に身体強化って言わないか？」

『ハンドパワー（腕力）』

「いや、だから、それ単純な身体強化だろ？」

『ハンドパワー（脚力）』

「脚力でハンドパワーはおかしいだろう!？」

『細かいこたあ、良いの！ 大体なんさー、身体強化って！ ププー、遅れてきちゃった病気が何かですか？ ププー』

「くつそうざいことこの上ない！ 単純に漢字当てただけだろうが！ なんか不満か!？」

『まあ、不満はないけど、呼称はハンドパワーが良い』

「なにがお前にハンドパワーを推させてるんだよ……」

『ガイアが俺にハンドパワーが良いぞと囁いているからさ』

「何で宇宙がお前にハンドパワー云々と囁くんだよ……」

『そっちのガイアじゃねえ、地母神の方だからね。まったく、困ったちゃんだなあ』

「よくわからないけど、お前がうざいということはわかったからもういいよ。とりあえず動物に対抗できるのはわかったけどさ、その動物が近寄ってこないし、さらにいえば見つけれないんだけど？」

『それは君が悪いんじゃないかな。だって、あんなに警戒心もなく、気配もバリバリで色々やってたら見つかるに決まってるじゃないか』

「いや、そんなのやり方わかんねーからな。こっちは都会派ボーイだからね。森とか入るの始めてだから。知性派である俺には、こんな作業は好ましくないんだよ、お分かりかな？」

『知性派（笑）だったのか、じゃあ仕方ないね』

「知性派の部分に悪意を感じた。とりあえず像を落としてお仕置きしてやるっ」

背中に背負っていた像を思いっきり振りかぶりながら木の根に打ち付けてやった。

それは脚力、腕力ともに鍛え上げられた人間が重心のことを理解し、遠心力も考慮にいれて威力を最大にするように努めてたような威力を、腕力で無理やりひねり出したかのような一撃だった。

ポカーンと盛大な音とともに木の根が盛大に爆散した。パラパラと木の欠片が空中に舞う。

「ごめんねー、強く落とすすぎちゃった。俺反省」

『イラツとクルわー。別に良いけどね、役割さえ果たしてくれれば。でもポイント溜まったら絶対君の額に肉って字を書くからねー。勝手にポイント使われて嘆けば良いんだー!』

「ちくしょう、このまま不毛な争いをしていても物事はまったく発展しないというのに、今とてもこの像を破壊してしまいたい。でも奇跡使われていて出来ない」

『像には傷一つつけさせないよ! そう、君の集めたポイントに賭けて!』

「スッキリしたから、許すわ。ほら、もう行くぞ。つたく、本当にだるいわ。何か出てこないかなー」

『正直、私も飽きて来てるんだよねー。何で私の目の前に信仰対象が出てこないんだろう。全て焼けて燃えてしまえば良いのに。スルトの炎を私は今欲しい。リセットボタンプリーズ』

「ヴァーチャル世代みたいなことやってないで一緒に何か探してくれ。正直、喉が渴いてないのに水が必要になってきたのがわかって焦ってるんだよ」

『ああ、人間の感覚じゃなくて、必要だからしなくちゃいけないって感覚になってるんだね。神代の体は人間のとは違うから結構びびくりでしょ?』

「確かに人間のとは全然違うな。俺としては情緒があって人間の体の方が好きだけど」

『誤作動も多いから人間の体はあまりお薦め出来ないけどね。まあ、住めば都ってことかな?』

「つつか、奇跡ポイント使って水の場所とかわからないのか? 極力使いたくなかったが、使わんとどうしようもない気がするんだが」

『あるけどポイント足りないかなー』

「そうかよ。お前が使った分と足したら?」

『その場合でもポイント足りないかなー。言っておくけど場所がわかるっていうことは案外高度なことだし、自分の知らない場所の事も理解出来るなんて千里眼も良いところだからね。高性能すぎてともじゃないけど手が出ないよ? 一応視力や聴力そのものは向上してるんだから、それで試してみれば良いじゃない』

「聴力で水の音を感じろってことか。ああ、それよりも木の幹潰せるから腕力あるんだから木を登って辺りを見渡すのも良いか」

『お勧めはハンドパワー（聴力）かな』

「はいはい、じゃあ、ちょっと黙っててくれや。耳をすますから」

『耳をすませば』

「あの映画の話題はやめろ。魔法使い候補である俺の前であの映画の話題はやめろ!」

そう叫んでから意識を集中させた。確かに耳が格段に良くなってい

『そう急がないですよ。あれだね、信仰対象がないんだっただらさ』

「おっ」

『作れば、良いんだよ』

現在持っている能力

その辺で寝ても体力回復出来る能力
無理すれば眠り続けられる能力

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111y/>

国家形成テンプレ/ついでに人間チート

2011年10月30日03時16分発行